

スイーツセミナー2

Sweets Seminar 2

日時 2026年4月24日(金) 15:50~16:30

会場 第2会場 都市センターホテル 3F
コスモスホール2
〒102-0093 東京都千代田区平河町2-4-1

小児の難解な筋弛緩を 筋電位感知型モニターで 定量化しよう!

座長 鈴木 康之 先生

東京女子医科大学 麻酔科
臨床卓越教授・特任准教授

演者 鈴木 孝浩 先生

日本大学医学部 麻酔科学系
麻酔科学分野 主任教授

整理券配布はございません

直接会場までお越しください。

共催:日本区域麻酔学会 第13回学術集会
フクダ電子東京中央販売株式会社

小児の難解な筋弛緩を 筋電位感知型モニターで定量化しよう!

鈴木 孝浩

日本大学医学部 麻酔科学系 麻酔科学分野 主任教授

小児におけるロクロニウムが理解しにくいとの声をよく耳にする。もともと肝腎排泄に依存するステロイド型筋弛緩薬であるロクロニウムは、個人間で作用時間のバリエーションが大きいのが欠点であり、そこに患者状態や麻酔薬等の影響も加わるため、作用深度を予測しにくいのはご存知のとおりである。とくに小児ではその発達段階に応じた年齢区分、新生児・乳幼児期、学童期、思春期で作用が大きく変化するため、筋弛緩状態を推測しにくいのであろう。これは幼弱な神経筋刺激伝達からの成熟化、急激な骨格筋量の変化などに起因する作用変化であるため、ここは理解の重要ポイントとなる。ただしこの知識だけでは適切な筋弛緩のマネジメントは不可能であり、小児の難解な筋弛緩こそモニタリングで評価すべきである。とくに覚醒時にはTOF比が測定可能な定量的モニタリングは、スガマデクスの至適量算定の指標となり、過少投与による残存筋弛緩や再クラーレ、ひいては術後低酸素、無気肺、肺炎などの危機的呼吸器合併症の回避に貢献する。2025年9月、日本麻酔科学会は「安全な麻酔のためのモニター指針」の筋弛緩のチェックに関して改訂し、抜管前に手指でTOF比 ≥ 0.9 を確認することを推奨した。この推奨の理解を深めるために添付されたFAQの中に、小児における筋弛緩モニタリングの必要性も解説されている。モニタリング機器や小児に対応したセンサーも充実してきており、今、小児での定量的筋弛緩モニタリングも標準化できるフェーズに入っている。臨床に役立つ小児の筋弛緩とモニタリングについて情報提供したい。